



グラフィカルな食品の  
国

zen-aku

【グラフィカルな食品の国】

黄色いマカロンが、赤いマカロンと話していた。

「今日は、どの窓を見る？」

「どこでもいい」

「どこでもいいの？」

「どこでもいいけど、おもしろい人間が見える窓がいい」

「そういうの、困るなあ」

お米のノガタも、そろそろ、窓をのぞきにいかないといけないなあと思った。

「ところで、ぼくは、今どこにいるの？」

お米のノガタは、誰かに聞いた。

「...」

「この辺りには、誰もいないのか...」

お米のノガタは、てきとうな方向へ歩き出した。

バカラのグラスが落ちていた。お米のノガタは、石を投げてバカラのグラスに当てた。

ちゃらん！ バカラのグラスが鳴った。

「だれ？」

後ろで声がした。

お米のノガタが振り返った。

クリスタルガイザースパークリングレモンがいた。

「お米さんか。名前は？」

「ノガタです」

「クリスタルガイザー飲みますか？」

「はい、飲みます！」

クリスタルガイザースパークリングレモンがバカラのグラスにクリスタルガイザースパークリングレモンを注いだ。ノガタが飲んだ。

おいしい！しゅわあ~~~~~っ

「クリスタルガイザーさん、お名前は？」

「メグです」

「メグさん。女性だったんですか？」

「いえ、男性です。名前のせいでよく間違えられるんです」

「そうなんですか。ところで中身がそろそろ無くなりますよ」

「そうですね、ノガタさんも、少し古くなってきていますね。私たち、窓を見に行かないといけませんね」

「今から二人で行きましょう」

「ぼく、石がないんです」お米のノガたが言った。

「じゃあ、私の石を二つに割ります」

メグが石を二つに割った。

お米のノガたとメグがそれぞれ石に乗った。

この国では石が空を飛べた。

二人は空を飛ぶ石に乗って、大聖堂に向かった。

この国の中心に大聖堂があった。大聖堂には無数の窓があった。窓をのぞくと人間の暮らしが見えた。別の窓をのぞくと、また別の人間の暮らしが見えた。窓の一つ一つが別々の人間の暮らしを映していた。

この国は食品たちの国だった。食品たちは、人間の暮らしを見ることが好きだった。今日もたくさん食品たちが大聖堂にやってきて、人間の暮らしを見るために窓をのぞきこんだ。

お米のノガたとメグも窓をのぞきこんだ。人間がカレーライスを食べていた。山盛りだ。とても山盛りだ。東京スカイツリーを模しているらしい。人間の暮らしを見ているうちに、お米のノガたの体が新鮮になった。ひび割れもなくなった。きれいになった。とれたてのお米になった。メグも、残り少なくなっていたクリスタルガイザースパークリングレモンの中身が補充された。工場出荷時のようになった。

この国では、人間の暮らしを見ると、食品たちが新鮮な状態に戻った。人間の暮らしを見ないと、次第に鮮度が落ち、腐り、朽ちてしまう。人間の暮らしを見ることで、食品たちは定期的に若返っていた。そして、何年も新鮮なままで生きていた。

【終わりに】

クリスタルガイザーにはレモン味があったのですね。知らなかった。